

八月末日現在で、約一万点の書簡を確認した。多くが常観宛の書簡であるが、弟の常音など関係者宛の書簡も含まれる。

書簡目録から指摘できることは、常観の影響力と人脈が読み取れることである。常観宛の書簡は、交友があった仏教関係者、常観の説教を聞法した者、全国各地の信者などからのものである。とくに求道会館は東京帝大と一高の近隣に位置することから、両校の教官・学生・出身者など知識人層の書簡も多い。また常観は大谷派僧侶だが、本願寺派など他宗派僧侶からの書簡もあり、一派に収まらず仏教界に大いに影響を与えていたことが伺える。因みに同地は浩々洞発祥地でもあり、清沢満之など浩々洞関係者宛の書簡もある。

注意すべき点は、はがきよりも便箋の方が、情報量は多いことである。常観は、その存在ゆえに各方面の著名人からの書簡が多いが、年賀状からは人柄と教養が見えて興味深い文字数は少ない。むしろ便箋に書かれたものが情報量は多く、そこには有名無名を問わず、様々な人物からの信仰告白が記されていることが少なくない。一例を挙げれば、宮沢賢治の父である政次郎は、熱心な真宗信者で常観と親交があった。政次郎の書簡もあるが、賢治の妹トシが常観に宛てた書簡二通（大正四年四月二四日、五月二九日付）が残されている。日本女子大に入学したばかりのトシの心の内面がそこに記されているのである。

本科研は、平成二三年度までの継続を予定している。求道会館所蔵の史料について、分類と評価は今後の課題である。最終年度までに、重要な書簡の翻刻、史料総目録の公表を計画しており、常観の影響力を実証的に明らかにしたいと考えている。

## パネルの主旨とまとめ

岩田文昭

真宗大谷派の僧、近角常観は東京本郷に求道会館・求道学舎を設け、そこで大正・昭和初期の主として知識人青年に大きな影響を与えた。しかし、近角の研究はこれまで皆無といってもいい状態であった。そのような状態となっている理由はいくつかあるが、その最大の理由として、近角の存在意義が従来の学問の内部に納まりがたいことをあげることができる。その影響は、さまざまな学問分野に属する領域に及んでいる。個別の学問は日々進歩し、その分析が精緻になるだけに、かえって、学問横断的な影響力を残した思想家の姿は捉えにくくなる。本パネルの発表者は、さまざまな宗教研究への関心をもち、よってたつ学問的方法論も異なる。本パネルは、異なった視点から、近角を論じることで、これまで看過されてきた日本の近現代の宗教史・精神史のいくつかの側面に新たな光をあてることを試みたのであった。

発表者の碧海寿広は、近角が刊行した雑誌『求道』に記載されている信者の信仰告白の形態に着目し、近代における新たな信仰告白の登場の意味について考察した。岩田文昭は、近角の説教を聞いた知識人青年の近角受容について、とくに二人の宗教哲学者、三木清と武内義範の思想を取り上げて論じた。ライアン・ワルドは、大正後期から生じた「句仏上人の僧籍削除問

## パネル

題」において句仏を擁護した近角の状況を解明した。句仏の処分についての「法的」根拠を問うた近角の批判は、それ自体は正当なものであったものの、大谷派の伝統・伝灯を重んじるという点で、いわゆる「近代化」の流れとは相反する独自の位置に立ったのである。大澤広嗣は、調査中の求道会館所蔵史料の概要を紹介して、史料に関する情報を多くの研究者が共有することを試みつつ、近角の重要性を示した。

これらの発表に対して、島蘭進は、近角常観と求道会館所蔵資料の意義を海老名弾正の本郷教会などと対比させ、「近代日本仏教史上、近代日本宗教史上のひじょうに重要な資料」とみなして、以下のようにその意義を五点において指摘した。第一に、近角の生涯と思想に関して、近代的な宗教思想・仏教思想・真宗思想として考察する意義があるとした。第二に、「近代的な宗教性の早期の現れとして」、とりわけ、当時の一高、東大の教養文化の中の宗教の重要性を理解する上で、求道学舎・求道会館と近角グループの宗教活動の意義を認めた。第三に、「清沢満之・浩々堂の人々との人間的関係、近代思想史・文学史上・心理学史上の影響力」に関する意義を指摘した。第四に、近代仏教教団、とくに近代大谷派の歴史の理解に関わる事柄における意義を、第五に、日本宗教史、とりわけ宗教学方法案、宗教と国家・政治のあり方に関わる事柄における意義を指摘した。その上で、島蘭は、発表者全員に対して、以下のような質問を提示した。すなわち、「清沢満之や清沢門下と共通点・類似点と相違点は何か」、「近角の大きな影響力の理由は、思想にあるのか、それ以外の理由があるのか」、「なぜ、かくも

大きな影響力をもったのか」、さらに、そもそも「近角の思想の主要な特徴は何なのか」といった質問である。そして、各発表者に対しても個別の質問を出した。また、会場からは、近角の後継者が出なかつた理由や、近角の信徒と他の宗教運動の信徒との比較に関する質問がだされた。これらの質問に対して、発表者が明確に答えたものもあつたが、また今後の課題として残されたものもあつた。いずれにしても、本パネルは、活発な質疑応答をもたらしたことで、近角研究の幕開けを告げることができたと思われる。